

声を紡ぐ

沖縄県立那覇西高等学校三年 久場 ありさ

六月のこの島に吹き抜ける風は
かつてこの島を蹂躪した鉄の暴風
あの夏、絶望の淵で漏れた悲鳴を
今も孕んでいるのだろうか
私は今、整然と並ぶ黒い石の波に立ち
「個」という名の尊厳を見つめている
平和の礎に刻まれた数多の名の波
階級も年齢も関係なく
ただ一人の人間として並ぶその石に
私はある四文字を見つけ立ち尽くす

「〇〇の娘」

名も分からぬまま
激動に呑み込まれたその人は
確かに、誰かに愛された娘であり
誰かの痛みに気づける
心を持っていたはずだ
その無念さを私たちは

「歴史」という

二文字で片付けてはならない
平和の波から
世界へと広がる祈りの波紋
それは激しい叫びではない
鈍い痛みのように地を這う
魂の訴えだ

「忘れないで」

という願いよりも重い
彼らからの警鐘だ
銃声が止んで八十一年

あの日、ガマの暗闇で
あるいは戦火の荒野で
誰にも聞き届けられなかった悲鳴
それを「なかったこと」にさせないため
私たちは今ここにいる
十八歳の私たちが生きる
今日という二十四時間
それは彼らがどれほど渴望しても
手が届かなかった奇跡だ
だからこそ私たちは
この一日の重みを噛み締め
散らばった声を薄れてゆく記憶を
一つひとつ拾い集める
風化は無関心という名の暴力から始まる
私たちはその風に抗い彼の声を
私たちの言葉で紡いでいく
日は昇り穏やかな青い海が
世界を繋ぐ
私はこの島に刻まれた悲鳴を
祈りだけでは終わらない
静かな訴えを確かな意思へと変えて
新しい未来をこの手で織り成していく